

言語理論と英語教育 (9)

— 言語コミュニケーションの構図 —

田 中 彰 一

Linguistic Theory and English Teaching (9) — The composition of language communication —

Shoichi TANAKA

This paper is concerned with what composes language communication. I will show that there are some important elements of the making of language communication and that they provide us with a new way of thinking about language learning. First, I will see the fundamental mechanism of semiotics which is the study of the way in which people communicate through signs, since language is primarily a system of signs. Second, I will indicate that communication problems come from the arbitrariness which is essentially incorporated into "coding" of language. Third, I will demonstrate the importance of the context of language communication as well as "encoding" and "decoding." Comparing with the context, I will make a comparative analysis of proverbs, idioms, formulaic expressions, metaphors, modal expressions, and honorific forms of English and Japanese. Finally, I will relate the making of language communication with English learning and indicate some important aspects of it.

key words: language communication, code, context, language learnig

1. はじめに¹

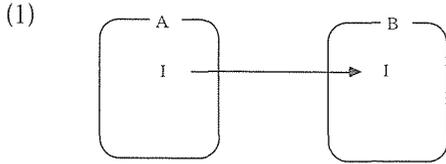
言語コミュニケーションは、私たちが人間社会でもっとも身近に体験するコミュニケーションであると言うことができる。一般に、発信者から伝送された情報を受信者が了解し応答することができたとき、「コミュニケーションが成立した」と言う。本論では、言語が記号であるという立場から、記号論の基本的な考え方を見ながら、言語コミュニケーションに必要な要素を整理し、英語と日本語に共通のコミュニケーションの構図を図式的に分析する。その分析を通して以下の3点を明らかにしたい。(i) 言語情報の受信者である聴き手または読み手は受動的に情報を理解するのでは

ないこと。(ii) 言語コミュニケーションの構図の認識が、外国語である英語を含むことば全般の理解と創出に役立つものであること。さらに、(iii) 同じ認識が、国際理解や異文化理解²を指向するコミュニケーション重視の英語教育にとって有益かつ重要であること。

2. コミュニケーションの要素

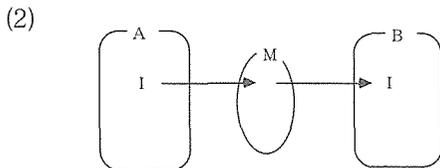
当然ながら、言語コミュニケーションにおいて情報を伝える媒体は言語という記号表現である。冒頭で述べたように、発信者から伝送された情報を受信者が了解することができたときにコミュニケーションが成立する。それは以下のような情報伝

達の図式を考慮すると明示的に理解できる。



ここで、Aは情報の発信者（話し手、著者）であり、Bは受信者（聴き手、読者）を示す。丸四角の枠はAとBそれぞれの持っている情報の総体を示している。IはAがBに伝えたいと思っている情報である。この図式(1)は一見言語コミュニケーションが成立している場合のように見えるが、実際にはそうではない。この図式には言語表現がないため、言語コミュニケーションとは言えないのである。したがって、情報IがそのままBになんの媒体もなく伝送されるということになり、およそ現実には起こりえない事態であると言える。無理をして想定すれば、テレパシーによる精神感応と考えられないこともないが、超能力的な話であって言語コミュニケーションとは言えない。

そこで、次のように図式化してみよう。³

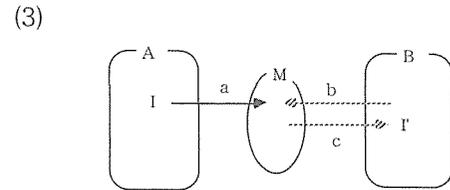


ここではAがBに伝えたい情報Iが言語表現のメッセージMに込められるということを表している。このことを、記号論ではメッセージに情報が「コード化」されると言う。コードとは、当該のコミュニケーションに特有の記号と、記号を結合する規則の集合である。言語コミュニケーションの場合、コードは音素、形態素とそれらの結合規則すなわち文法ということになる。したがって、メッセージMは、当該言語の持つ体系的な取り決めであるコードに基づいて情報Iが込められた言語表現である。以下この過程を「エンコード(暗号化, encode)」と呼ぶ。

言うまでもなく、人間のコミュニケーションは(2)のように直線的で一方向的ではなく、可逆的、

循環的な性質を持っている。そのため、次の段階にはBが情報の発信者となり、矢印が逆になる。そうした受け答えが相互に繰り返されることが言語によるコミュニケーション活動である。つまり、言語コミュニケーションは相互的な性質を持っており、文化的社会的な活動をつくり出すのに貢献するわけである。

しかしながら、受信者であるBが情報IをMから受け取るこの図式に問題はないであろうか。たとえば、Bが情報Iを誤解したり、情報Iの意味をはっきりと理解できない場合を想定することができる。もしも、図式(2)のように情報Iが送られてくるのを待つだけの受動的な受信者であれば、Bの解釈にそのようなずれは生じないはずである。そうすると、言語コミュニケーションにおいて、Bは受動的に情報を「受ける」のではなく、より積極的な役割を果たしていると見なければならぬ。したがって、次のような図式を想定できる。



この図式の波線の矢印bとcは受信者Bがメッセージに込められた情報を積極的に読みに行くことを意味している。つまりこの過程は表現の「デコード(解読, decode)」をしているのである。矢印bは解読のはたらきかけ、cは解読の結果情報I'が得られることを示している。コミュニケーションが成立する場合は、I'がAの伝えたい情報Iと同じか、Iに近似のものであると言える。コミュニケーションにずれが生じる場合は、I'に何らかの不合理性がある。その際、Bは整合性のあるI'を得られるまで推論・推測を繰り返して行おうと考えられる。

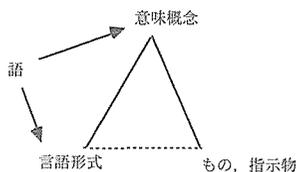
以上をまとめると、コミュニケーションの要素として、まず情報のコード化が第一の条件となる。それをを行うのが発信者であり、言語コミュニケーションでは言語表現としてコード化されたメッセ

ージが情報の担い手である。一方、情報の受信者は単に受動的に情報を受け取るのではなく、メッセージのコードを解読することで情報を読み解くことを見てきた。それを図式的に示しているのが(3)である。⁴

3. 言語の恣意性と意味の広がり

よく知られているように、ソシュールに指摘された言語の持つ恣意性(arbitrariness)は言語の本質に関わる性質である。恣意性とは、言語表現とその意味が恣意的な関係にあるということである。前節で見たように、記号論では記号と記号の結合規則を「コード」と呼んでいる。コードがつくり出す形と意味を結びつけている関係が実は恣意的なものであることは、どのような意味を持っているのであろうか。指示(reference)関係を示す「意味の三角形」で考えてみよう。⁵

(4)



この図式からわかるように、言語は記号としてのことばと意味概念に直接関わっているが、破線で示したように、指示対象である指示物そのものとは直接的・本来的な関わりがないのである。そのため、たとえば「ヤマ」という言語記号は、山そのものと直接的本来的な関係がないということになる。⁶なぜなら、他の言語では山は「ヤマ」とは呼ばれないからである。

同様に、同じ言語でも方言や地域語で呼び方が違うことがある。たとえば、イギリス英語とアメリカ英語の対比で、flat/apartment, underground/subway, lift/elevatorなどがある。しかし、(4)に示されているような指示関係がいったん母語で感覚的に身につけてしまえば、この恣意性は気づかれにくい性質を持っている。そのため、母語と異なる言語を学習して初めて気づくものなのである。したがって、言語間で指示関係が違っている場合には、調整が必要になる。たとえば英

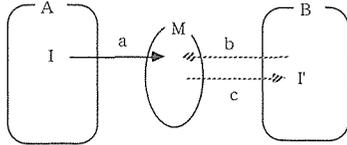
語のbrotherは日本語の「兄」も「弟」も指すことができ、年上か年下かを問わない。⁷また、日本語だと「ニワトリ」で、鶏肉も鶏も指せるが、英語ではchicken, a chicken (chickens)と言いつけなければならない。⁸さらに、英語も日本語も言語の性(gender)を顕在化させない言語であるが、独語仏語では顕在化させる⁹ことなど、恣意性の現れととらえられる。さらに言えば、言語記号の持つ外延(denotation)と内包(connotation)の差も考えることができる。たとえば、英語のpoliceman, officer, cop, fuzzはすべて警官を意味するので外延は同じであるが、内包的意味は異なっている。逆に言えば、言語が恣意的であるからこそ、同じ指示物でも別の言語形式で表現することによって、情的意味の差を表している。

これまで見てきたような言語の恣意性は、言語コミュニケーションで誤解や解釈のずれの本質的な原因になっていると考えられる。また、指示の差があることから、ことばと意味のつながりがコードに基づくものであり、コードが違えばまたつながりが別のものになることがわかる。外国語でのコミュニケーションではコードが複数になっているため、困難な状況になりやすいのである。また、そこには文化的基盤の差に由来する違いもあろうであろう。¹⁰

4. 言語コミュニケーションの構図

言語の恣意性は、言語コミュニケーションの成否にかかわる要素を含んでいる。受信者が言語記号の集まりであるメッセージを解読する際には、コードに基づいて規定された表現となっていることを想定して読みとりを行うのであるが、コードそのものを共有していない場合、受信者は解読できないことになる。たとえば、Aが、Bの言語とは異なる外国語(英語)の話者の場合、Bのデコードにはどんな困難があるであろうか。ここで、標準的な構図とした(3)の図式をもう一度見てみよう。

(3)



たとえば、aのエンコードとbのデコードにかかわるコードが異なっている場合には、Bの解釈は負担が大きくなる。メッセージMが外国語で表現されている場合、込められている情報を解釈するためにBは自分の母語のコードの場合とは違ったデコードをおこなう必要があるからである。語彙の発音・綴り・意味及び構文、統語に至るまですべて異なる表現になるため、込められた情報Iを的確に理解するにはかなりの外国語の能力が必要であると言われている。しかしながら、解釈・理解するためにコードをすべて対応させることが容易なことではないにもかかわらず、実際の日常会話のような場合、私たちはそれなりに外国語圏でのコミュニケーションをこなし、意思伝達を達成することができる。これはなぜだろうか。言語コミュニケーションの(3)の構図にはまだ足りない要素があるということになる。

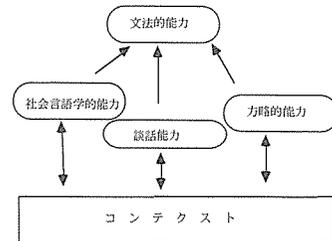
Canale and Swain (1980)が指摘したコミュニケーション能力 (communicative competence: 以下CC)の四つの要素から考えてみよう。

- (5) a. 文法能力(grammatical competence)
 b. 社会言語学的能力(sociolinguistic competence)
 c. 談話能力(discourse competence)
 d. 方略的能力(strategic competence)

(5a)に規定されている能力は語彙(発音・綴り・意味)、構文、統語の能力と知識を意味する。この能力とは、上で見た言語表現のエンコードとデコードのための能力と言える。一方、他の3つの能力はすべてコンテキストとかわる。コンテキストとは、発話の場(面)、状況、文脈である。社会言語学的能力(5b)は、言語を場面にあった形で用いるにはどうすればよいかを知っている能力、談話能力(5c)は、談話の流れや文脈にあった形で言語を用いることができる能力であり、方略的能

力(5d)は、エンコードとデコードがうまくいかない時に、発話の場面に合わせて、言語表現を修復したり、補助したりできる能力である。¹¹CCをこのように考えると、コンテキストは言語表現と密接な関係を持っていることがわかる。つまり、コンテキストは社会言語学的能力、談話能力、方略的能力を通して、エンコードとデコードのための文法的能力を支えているのである。そのことを図式的に示してみると次のようになる。

(6)



では発話の場面であるコンテキストにはどのような要素があるのであろうか。Geis(1988)によると、コンテキストは以下のように整理される。

- (7) a. 物理的コンテキスト
 b. 社会的コンテキスト
 c. 認知的コンテキスト
 d. 言語的コンテキスト

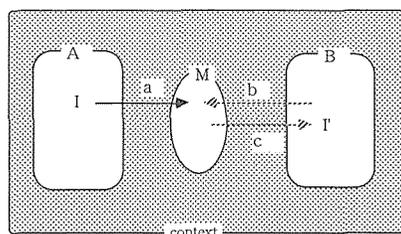
(7a)の物理的コンテキストは、情報の発信者と受信者をとりまく物理的な環境である。たとえば「ここは寒い」と言うときに、「クーラーを弱くしてほしい」を含意しているのか「窓を閉めてほしい」を意味しているのかは物理的コンテキストで決まる。社会的コンテキスト(7b)は、コミュニケーションがなされる場の人間の社会的関係である。日本語では目上の人に敬語を使うようなコンテキストが考えられる。(7c)の認知的コンテキストは、情報の発信者と受信者の持つ共通認識や世界観を意味する。たとえば、「おめでとう」の発話は事前に受信者により出来事が起こっていることが前提となって発せられる。言語的コンテキスト(7d)は、会話の話題や目的を意味するが、ここでは外国語と母語の言語的な環境のことも考慮しなければならない。

このように、コンテキストは、言語そのもので

はないにもかかわらず、言語コミュニケーションにとって重要な役割を果たしていることがわかる。後で見るように、コンテキストにより言語表現の意味が変化する場合さえあるため、言語表現とコンテキストの照合能力は言語コミュニケーションに不可欠な要素となっているのである。

そこで、言語コミュニケーションの基本的過程が発話の場であるコンテキストの枠内に入るように、(3)を以下のように修正しよう。

(8)



(3)と違い、ここではaのエンコードとb,cのデコードにコンテキストとの照合が加えられると考えよう。しかも、(7)で見たように、コンテキストには物理的な周りの状況以外に、社会的文化的な環境や情報の発信者と受信者の持つ背景的な知識や世界観、さらには会話や談話の流れまでを含む環境がかかわることを考慮すると、実際の言語コミュニケーションにはかなり複合的なプロセスが関わっていることになる。(8)の図式は便宜的に(3)で示した基本的なメッセージ伝達をコンテキストで囲ったものではあるが、言語コミュニケーションでは発話の場面を意識した言語活動が行われることを示しているのである。

次節では、言語コミュニケーションの構図に、発話の場面であるコンテキストへの配慮が不可欠であることを具体的に見てみる。

5. コンテキストの役割

前節でコンテキストの要素を見たが、実際の言語コミュニケーションにコンテキストはどのようにかかわるのであろうか。また、外国語である英語のコミュニケーションの場合は、コンテキストをどのように利用すればいいのであろうか。

たとえば、(7a)で見たように、次のような発話

はコンテキストによりいろいろなメッセージを持ちうる。

- (9) a. ここは寒い。
b. 来週の月曜日はあいていますか。
c. Are you free tonight?
d. The window is open.

これらは文字通りの文の意味に加えて、発話としての意味情報を伝えていると考えることができる。そのような意味は間接的に表現されているということになり、複数の可能性がある場合の意味はコンテキストによって決定されるのである。

日本語と英語の諺やきまり文句を比較すると、言語表現が部分的あるいは全体として対応しないにもかかわらず、使われるコンテキストが同じであるために同じ意味であるとされる。

- (10) a. 覆水盆に返らず。
b. There is no use crying over spilt milk.
(11) a. 年貢の納め時
b. The game is about over.
(12) a. 弱肉強食
b. the law of the jungle
(13) a. 早い勝ち
b. first come, first served

これらの例では、日本語と英語の発想が異なっている。たとえば、(10)の日本語では「こぼれる」主題が水であるのに対して、英語では牛乳である。(11)(12)では、日本語が歴史的制度や自然界への洞察を発想源としているのに、英語では試合やジャングルという具体物に発想を求めている。(13)では、時間に関係することが日本語では勝ち負けと捉えられているのに対して、英語では食事などの応対を受けることと結びつけられている。このような違いがあるにもかかわらず、これらの表現がそれぞれ同義であるとみなされるのは、これらの表現の使われるコミュニケーションのコンテキストが英語と日本語で相当するものであると考えられるからである。

しかしながら、言語表現がどのくらいコンテキストに依存するかは、英語と日本語でかなりの違いがあると言われている。身近な表現で比較して

みよう。

まず、日本語では動作の主体や状態の主題を明示的に表す必要がないことが多いが、英語では必ず主語が必要である。

- (14) a. 昨日はテニスをした。
b. We played tennis yesterday.
- (15) a. 降っている。
b. It is raining.

場合によっては、日本語で目的語の省略や動作を名詞化しただけの表現さえ可能である。

- (16) a. 落としましたよ。
b. You dropped a handkerchief.
- (17) a. 忘れ物！
b. You forgot the umbrella.

さらに、日本語では依頼表現や挨拶ことばにきまり文句が多い。一方、英語では相当するものがないことが多い。換言すれば、日本語の短いきまり文句は状況によりいろいろな意味を帯びるため、一定の英語表現に対応させることができない。例を見る。

- (18) a. お願いします。
b. Would you open the door?
Can I see those pairs of shoes?
- (19) a. よろしく。
b. It's nice to meet you.
Please say hello to her.

- (20) a. どうも。
b. Thank you very much for everything.
I'm very sorry.

これらの日本語のきまり文句は、コンテキストによりいろいろに解釈される。(英語は2例のみ提示。)日本語の表現をより丁寧にすることも可能である。逆に、英語では日本語に相当するような表現まで発話を短くすることができない。また、英語では状況に頼らず依頼や感謝の内容を明言する傾向が強い。このような対比的な特徴により、日本語を発話の場面への依存度が高い「高コンテキスト(high context)言語」、英語をそのような依存度が低い「低コンテキスト(low context)言語」と呼ぶのである。

記号論の「コード」で言えば、日本語は「エンコード」においてコンテキストへの依存度が高いので、主語の省略や表現の簡素化が可能であるという言い方になろう。一方、英語では、主語の省略ができないなど、コンテキストに依存しない(文法的に独立した)表現をエンコードしなければならないのである。「デコード」においても、日本語はコンテキストとの照合をおこなうことによって言語表現の意味をデコードする傾向が強いものに対して、英語では表現の持つ文字通りの意味を期待する傾向があると言えよう。

このようにコンテキストとコードとを関連づけてみると、エンコードの過程で言語による違いがあることがわかる。また同時にそれに対応するデコードの方も、言語表現が文字通りの意味を表すと捉えるか、「察し」によって別の発話の意味を表していると考えようとするかという違いがありそうである。そうすると、言語表現とその言語の持つ「発想」の関係を見なければならない。

6. 言語と文化

言語と文化は密接に関係し、サピア・ウォーフ仮説のように、言語が文化を規定するという考え方もある。前節で見た例から、少なくとも文化の持つ発想が言語表現に反映されているとは言えるであろう。そこでは諺やきまり文句における違いを指摘したが、日英語共に同じ発想でつくられている定型表現を見てみよう。

- (21) a. ものには限度がある。
b. There's a limit to everything.
- (22) a. 株が上がる。(比喩的意味)
b. one's stock goes up.
- (23) a. 目の玉が飛び出すような
b. eye-popping

このように、人間の感覚や社会的な制度が同じ場合には、同じ発想の表現を作り出すが、より後半に日本語と英語の発想を比較すると、やはり特徴的な差違が顕著である。記号論的に言えば、「エンコード」の際の言語の発想に違いがある。たとえば、次のような対比がある。

(24) a. お金がある。

b. I have some money.

(25) a. 太郎には三人の子供がいる。

b. Taro has three children.

(26) a. 太郎は熱がある。

b. Taro has a fever.

これらの例では日本語が存在発想の表現であるのに対して、同じ意味が英語では所有表現として発想されている。ここで、この対比的な発想を日英語で逆にしてみよう。

(24') a. お金を持っている。

b. *There is some money with me.

(25') a. ??太郎は三人の子供を持っている。

b. *There are three children with Taro.

(26') a. ??太郎は熱を持っている。

b. *There is a fever with Taro.

(24a)の日本語の所有表現はそれほどおかしくならないものの、(25a)(26a)の人間、抽象的な「熱」を持つという日本語の表現はかなりおかしくなる。英語では、どの場合も存在の発想では捉えることができない。(母語話者の判断による。)したがって、日本語では存在の発想で表現をつくり、英語では所有の発想で表現をつくる傾向が強いことが対比的に理解できる。むしろそうした発想で表現が「エンコード」されなければ、それぞれの言語で不自然な表現となってしまう、容認されない表現となるのである。

さらに、次のような対比を見てみよう。

(27) a. うちに空き部屋があります。

b. We have a vacant room.

(28) a. 忘れ物があります。

b. You forgot something/the umbrella.

(29) a. 海が見える。

b. We can see the ocean.

(30) a. あなたが気に入った。

b. I like you.

(27)(28)の日本語表現はこれまでの例と同じように存在の発想で作られている。(27b)では所有の表現の英語となっているが、(28b)では忘れる行為の動詞を使って表現されている。日本語では状

況を状態として捉え、「ある」で表現されているのに対して、英語では人を主語として行為として捉える視点が感じられる。さらに、(29)(30)でも、英語では人を主語として、「海を見る、人を好く」と表現しているのに、日本語の対応する表現では対象が話し手に近づいてくるような発想をしていると言える。¹²

ここで、日本語の自動詞と他動詞の対応を考えてみよう。

(31) a. 見える、割れる、建つ、溶ける、...

b. 見る、割る、建てる、溶かす、...

(31a)の自動詞の持つ特徴は、あたかも何かはひとりだけでそう「なる」という意味が共通していることである。それに対して、(31b)の他動詞では、主体が積極的に何かを「する」という発想になっている。これまでこの節で見た例では、日本語の表現の発想法に「ある」や「なる」が、英語には「する」が、傾向としてあると言えるであろう。このような対比から、日本語は「する」的、英語は「する」的という言語類型論的対照分析がなされている。¹³

言語コミュニケーションにかかわる日英語の発想の相違を見てきたが、さらに、文化とかかわる言語の発想の相違としてメタファー表現がある。類推を用いて比喩的に表現されるメタファーの場合、たとえば、次のような例では日英語に共通の発想があると言えるであろう。

(32) a. 道が丘の上まで走っている。

b. The street runs to the top of the hill.

(33) a. 気分が沈んだ。

b. Her spirits sank (at the news).

(34) a. 時間を使い果たした。

b. He spent all of the time.

(32)では人間の「走る」行為を道に拡張した発想、(33)では物理的に「沈む」行為を気分にはめる発想、(34)では時間をお金に喩えて「使う」発想でそれぞれ表現されている。しかも日英語で対応する表現が可能であることから、これらの発想は共通していることがわかる。しかしながら、メタファー表現の多くは特定の言語文化を反映する

発想があるため、対応する表現が他言語ではメタファーになっていなかったり、別のメタファーで表現される。

(35) a. 君は考え方が甘い。

b. You are optimistic.

(36) a. 彼はクラシック音楽に明るい。

b. He really knows classical music.

(37) a. おじいちゃんは耳が遠い。

b. My grandfather is hard of hearing.

これらの例では日本語がメタファー表現となっているが、対応する英語表現はメタファーとは感じられない。逆に次の対比では英語がメタファー表現であるのに、日本語が文字通りの表現となっている。

(38) a. He got the ax.

b. 彼は解雇された。

(39) a. Somebody broke wind.

b. 誰かがおならをした。

(40) a. He passed away.

b. 彼は死んだ。

もちろん、次のように英語の文字通りの直接的表現も可能である。¹⁴

(38a') He was fired.

(39a') Somebody farted.

(40a') He died.

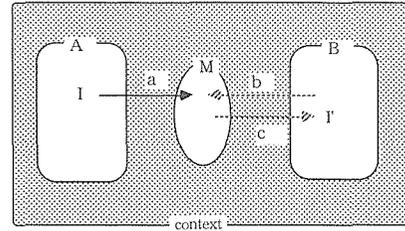
それでもメタファー表現が存在するのは、人の言語文化における滑稽さを誇張するための創造性の現れ(38a)(39a)であつたり、あからさまな表現を忌避し婉曲に表現する(40a)ことによつて社会的な配慮を示すためということであろう。¹⁵

このように見てくると、メタファーはそれぞれの言語文化の発想を背景に生まれた表現であるということができよう。特定の言語の文化で使い慣らされていくにつれて、上で見たように、独特の言い回しとなっているのである。そんな言い回しあまりに自然なために、母語話者にはあたかもその表現法しかないかのように感じられメタファー表現とは気づかれにくい側面がある。そのような側面を外国語として学ぶとなれば、発想の違いを認識して進める必要があることになる。

7. 言語と社会

言語コミュニケーションにコンテキストがかかわる際にもうひとつの重要な視点は、社会的な側面である。CCの(5b)で見たように、社会言語学的な要素が言語に反映されるからである。社会的なコンテキストへの配慮は、特に対人関係においてみられる。ここで、もう一度言語コミュニケーションの図式を見てみよう。

(8)



情報の発信者Aは伝えたい情報Iをもっているわけであるが、それをどのように伝えるか(エンコードするか)は、コンテキストにより異なる。つまり、Mの表現そのものはコンテキストへのAの配慮で様々に変わりうるのである。ここでは、モダリティ表現と敬意表現を見てみる。

モダリティとは話者の心的態度を指す。たとえば、「雨が降る」ということを言いたいときに、話者がその可能性に疑問をもっていたり、自信がなかったり、あるいは必ず降ると思っているときに、日本語ではそれぞれ次のように言うことができる。

(41) a. 雨が降るかな。

b. ひょっとして雨が降るんじゃないかな。

c. きっと雨が降るよ。

これらの例の下線部は、「雨が降る」ことについて話者の評価・態度を表明している箇所、つまりモダリティ表現といえる。日本語ではこのように副詞・終助詞がその機能を果たしているのである。英語では、次のようにIを主語とした主節表現や助動詞、付加疑問部などを考えることができる。

(42) a. I wonder if it will rain.

b. I think it will possibly rains, won't it?

c. I'm sure it will rain.

このように、話者はコンテキストにより、心的態度を付け加えた言語表現で情報Iを伝えているのである。つまり、いつも確実な情報や証拠をもとに言語コミュニケーションをおこなっているのではないため、コンテキストの制約の下で言語化される側面であると見ることができる。そのため、情報の発信者Aは、受信者Bにどれくらいの確実さで自分が情報を伝えているのかを明示するという社会的な配慮をしているのである。

このような傾向をさらに進めたものが敬意表現であると言える。敬語が発達している日本語には大きく分けて「尊敬、謙譲、丁寧」の3種類の社会的なコンテキストを反映する表現があると言われる。たとえば、日本語の「食べる」は次のような敬意表現をつくることが可能である。

- (43) a. お食べになる、召し上がる、食べられる
 b. いただく、頂戴する
 c. 食べます、食べるのです

これらはコンテキストにおける発信者と受信者の社会的関係を反映する形で言語化される。社会的概念の「ウチ」と「ソト」で言えば、ソトの受信者に対する言語表現とウチの受信者に対する言語表現は異なり、基本的にソトの人間に対して敬意表現が使われ、ウチの人間にはそうした表現を使う必要がないと言われている。

英語の敬意表現はどうなっているのであろうか。まず、呼びかけに使われる(44)のような表現は日本語と同じく尊敬表現であろう。

- (44) a. Sir, Madam, Her Majesty, His Highness
 b. Mr., Mrs., Ms., Miss.
 c. lieutenant, officer, doctor, ...

しかしながら、英語には上で見た日本語の「食べる」に対応するような表現の変化はないため、敬意表現はないと思われているが、それは間違いである。これまで見てきたように、言語コミュニケーションにとってコンテキストと言語表現との密接なかわりから、英語にも社会的に情報の受信者を配慮した表現が存在し、発信者はそれを使い分けている。たとえば、英語ではモダリティ表現により言語表現を間接的にしていくことで敬意を

表すことができる。「煙草を吸うのをやめて下さい」という依頼表現を見てみよう。

- (45) a. Stop smoking.
 b. Will you stop smoking?
 c. Would you stop smoking?
 d. Can you stop smoking?
 e. Could you stop smoking?
 f. Could you possibly stop smoking?
 さらにモダリティ表現を付加することもできる。
 (45) g. I wonder if you could stop smoking.
 h. I was wondering if you could stop smoking.

このように表現を長くすることで敬意は増すとされている。¹⁶自己紹介の場合にも、日本語と同様に、いくつかの表現が可能であり、

- (46) a. I want to introduce myself.
 b. I'd like to introduce myself.
 c. Let me introduce myself.
 d. Allow me to introduce myself.

どの表現を用いるかは話し手と聴き手のコンテキストにおける社会的関係に依存する。コンテキストが異なるならば、同じ話し手と聴き手であっても違う表現になる可能性もある。たとえば、インフォーマルな場面であると両者が認めれば、フォーマルな場で言う自己紹介表現とは異なる表現を用いることは十分考えらえるのである。

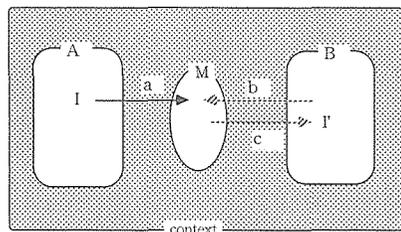
このように、コンテキストを媒体として社会的な側面を表現に反映させるシステムがもともと言語に備わっていると見ることができよう。話し手である情報の発信者はそれに配慮した上で言語表現を選んだり、作り出すという言語活動をおこなっているのである。

8. コミュニケーションのための英語教育

これまで見てきたように、言語コミュニケーションは単にメッセージのやりとりでおこなわれているのではなく、コンテキストにおける発想や対人関係に配慮した言語表現を介しておこなわれている。ではこのコミュニケーションの構図は、英語教育にどのような視点を与えてくれるであろう

か。ここで、今一度言語コミュニケーションの図式をみてみよう。

(8)



英語学習者から見れば、aの過程が「表現の能力」、b,cが「理解の能力」ということになる。これは従来型の英語教育でも考慮されていた視点である。ここで強調すべきことは、bの過程が表現Mへの能動的はたらきかけである点である。これまででは、情報の受信者Bが受動的に情報を受け入れるという見方であるため、Bの持っている言語認識や日英語の比較言語的な視点が不足していたと考えられる。

また、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」と大きくかかわる「コミュニケーションへの関心・意欲」や「言語・文化に対する関心・理解」は新しい観点を内包しており、評価が難しいと言われている。これらの観点とかかわるのは言語コミュニケーションのコンテキストに他ならない。言語の使用場面を想定した教材開発や言語活動の工夫はコンテキストへの配慮なくしてはあり得ないのである。つまり、コミュニケーション重視の英語教育では、このような言語コミュニケーションの仕組みを考慮した多角的な視点から指導を考えるべきである。

8.1. 言語表現Mを意識した視点

情報Iを英語の表現Mに込める「エンコード」と英語表現に込められた情報の「デコード」には、英語の総合的な言語能力が必要となる。それは、表現M自体の語彙や文法の正確さを左右する、(5a)でみた文法能力であるからである。従来型の表現の完成度のみを指向した英語教育では、そのような表現の正確さのみを強調する傾向があった。しかしながら、外国語としての英語をコミュ

ニケーションに用いるのならば、最初から完成された表現や常に正しい解釈を期待するのは無理があると言える。では外国語としての英語のコミュニケーションを成立させるためには、表現そのものの他にどんな方策があるのであろうか。

その方向で言語表現Mを意識すると、場に合った表現の適格性やメッセージとしての整合性には、やはりコンテキストの考慮を必要とすると言える。したがって、語彙の正しい発音や正しい綴り字の指導、文法的な正しさの指導ばかりでなく、コミュニケーションを促進させる要素がコンテキストにあることを忘れない必要がある。そのため、(5)で見たCCの全体像を配慮した言語能力の育成を考えるべきであろう。それは、(6)で見たように、言語表現の能力のみを養成するのではなく、コンテキストとの照合能力を補助的に使えるようにして、CC全体の力を養成するというのである。これは「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」という目標に合致していると思われる。

8.2. 情報の発信者Aを意識した視点

この視点には2つの場合が考えられる。Aが英語話者である場合と日本語話者が英語を発する場合である。前者の場合、BがAのMを理解する際に、Aの背景にある（英語文化を含んだ物理的、社会的、認知的、言語的）コンテキストを考慮に入れなければならない。言語表現Mを解釈しようとしてうまくいかない場合、この配慮が大きな意味合いを持つことになる。たとえば、次の表現を見てみよう。

(47) How many times do I have to tell you?

コンテキストにおいてAが事態に不満を持っていることが前提としてわかっているならば、この表現が持つ意味合いが質問ではなく非難・問責であることがわかる。このような間接的な表現の解釈にはコンテキストの考慮が不可欠である。

後者の場合、つまり日本語話者が英語を発する場合、日本語の背景的な知識や常識がそのまま英語に使えないことがあることを考えておかなけれ

ばならない。特に日本語から英語への直訳が英語としては容認されない表現となる場合、最大限の注意が必要である。たとえば、(48)を見てみよう。

(48) a. 今日はゴルフです。

b. *Today is golf.

c. I'm going to play golf today.

(48a)の直訳(48b)は、英語ではぎこちない文になってしまう。正しく(48c)のような表現を使えるようになるには、英語と日本語の表現の傾向を意識しなければならない。特に、言語活動がコミュニケーションのためのものであることを指向するならば、英語によるやりとりであることをかなり意識させる必要があると言える。学習者の出力が日本語の表現や発想による英語表現になってしまうように目配りをしなければ、意味のある言語活動とならない場合があるからである。決まり文句的な語句の繰り返しで定着を図るという言語活動でも、学習者が言語コミュニケーションの活動をおこなっていることを意識させたい。そのためには、情報の発信者のしての自分の立場をしつかりと認識させ、その認識に基づいて言語活動をおこなうという基本姿勢を設定したい。この姿勢があれば、言語表現に対応するコンテキストを想定することが容易になり、interviewやdiscussionの活動が裏付けられた、意味のあるものになると期待できる。

このように、情報の発信者への視点は、コンテキストへの配慮の重要性を示しており、その延長線上で、文化的な発想の転換や調整が必要になることも示唆している。

8.3. 情報の受信者Bを意識した視点

この視点もBが英語話者の場合と日本語話者の場合を考えることができる。第2節で見たように、いずれの場合もBは受動的に情報を受け入れるというより、表現Mにはたらきかけて適当な解釈をおこなうと考えられる。特に、表現Mの最初の解釈に問題が生じるような場合には、推論や類推を通して積極的にはたらきかけ、可能な解釈を設定し、その中から最も確からしいものを選び出すと

いう解釈をおこなっていると想定できる。

Bが英語話者の場合、Bは当然英語話者としての文化的背景や知識で表現Mを解釈しようとするであろう。逆に、Bが日本語話者の場合、英語表現Mを日本語の文化的知識で解釈する傾向があるかもしれない。しかしながら、いずれの場合も、Mの発信者Aの文化的背景を考慮に入れなければならないことを前節で見た。言語表現は独立してつくられているのではなく、発信者Aの発想や文化で言語化されているからである。そのために、BはA（あるいは両者）を取りまくコンテキストの存在を意識すべきでなのである。

8.4. コンテキストを意識した視点

これまで見てきたように、コンテキストがコミュニケーションにおいて果たす役割はしばしば決定的である。コンテキストにおいて、発信者Aの意図が明らかである場合は、たとえ言語表現Mが表現では逆のことを言っている、正しく解釈される。たとえば、皮肉や反語の場合がそれに当たる。雨が降っているコンテキストでの(49a)や、

(49) a. "It's a very fine day, isn't it?"

b. "John is a very kind man."

後から来た人に対してジョンがわざとドアを閉めたというコンテキストでの(49b)の発話自体は明らかに反対の意味を表しているにもかかわらず、当該のコンテキストで正しく皮肉として解釈されるのである。これはコンテキストの持つ決定的な重要性を示している。このような場合、コンテキストは言語表現そのものと同じくらいの重要性を持つと言ってもいいのではないだろうか。もちろん、皮肉以外でも、コンテキストの持つ情報は大きく言語表現に影響を与えている。第5節で見たように、日本語の表現はコンテキストへの依存率が英語と比較して高い。逆に、英語がコンテキストへの依存度が低いことを認識して英語学習を進めることは、英語の表現そのものを学習することと同じ程度の重要性を持つと言える。このことは、まさに言語コミュニケーションの認識であり、コミュニケーションのための言語学習であるとい

えるのではないだろうか。

8.5. 異文化理解へ

このように見てくると、言語コミュニケーションを日本語と英語に関して対照的に見る視点が可能になる。言語表現ばかりに注意を向けるのではなく、記号論における「コード」「エンコード」「デコード」の過程を把握し、「コンテキスト」の重要性を再認識する視点が、日本語の特徴が外国語である英語とどのように異なるのかという異文化理解の視点をも提供するのではないだろうか。言語は文化の一部である。その言語を対照的に見ると、発想の比較、表現の傾向、モダリティや敬意の表し方の違いなど、文化とかがかわることにならざるをえない。このような視点は、これまで指摘してきたように、表現そのものの性質というより、コンテキストによって発揮される言語表現の特徴ということが出来る。その特徴を文化的に考えていくと、言語文化論や異文化理解の観点になる。この観点から「コミュニケーションへの関心・意欲」や「言語・文化に対する関心・理解」を言語のレベルで育成することができるのではないかと思われる。

9. 結語

本論では、まず情報の伝わり方を記号論的¹⁷⁾に整理したのち、言語コミュニケーションの要素をまとめ、言語の恣意性が本質的にコミュニケーションを難しくしていることを指摘した。さらに、CCの考察から、言語表現とコンテキストの関連を探り、情報が伝わるためのコンテキストの役割を日英語の間接表現や決まり文句を例に対照的に分析した。さらに、言語の持つ発想を日常表現とメタファー表現で例示し、文化的な対照比較をおこなった。その後、コンテキストへの配慮がかわるモダリティ表現と敬意表現の実際を見て、最後に言語コミュニケーションの構図の観点から英語教育のあり方を探った。

言語コミュニケーションの構図を以上のように見てくると、(8)の図式で明らかなように、言語

表現そのものの構成能力や理解能力を高めることとともに、言語表現に現れる文化的発想や表現とコンテキストを照合できる能力、さらにコンテキストにおける話者の意図を推論できる能力が同じ程度に重要な要素であることがわかった。

指導要領の目標に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が設定されて久しいが、言語活動を取り入れた実践でもコミュニケーションへの配慮が不足しているものが見受けられる。本論で見た言語コミュニケーションの構図に関する考察は、そうした不足を埋めるための十分な内容をもつ言語認識を示してくれていると言えよう。

註

¹⁾本論は平成14年度及び15年度のネット授業「人間社会とコミュニケーション」において筆者の担当した「言語コミュニケーション」の単元の内容に基づいている。ネット上でおこなわれた学生との質疑応答は考えを整理するのに有意義であった。記して感謝したい。

²⁾より広く考えれば、「国際理解」「総合的な学習の時間」「メディアリテラシー」等の授業にも関係し、「ことばがすべての科目の基礎となる」ことを裏付けることができるであろう。

³⁾この図式は、アメリカの応用数学者Shannon等によって示されたコミュニケーションモデルと基本的に同じである。Shannon (1948)の冒頭では以下のように述べられている。

(i) The fundamental problem of communication is that of reproducing at one point either exactly or approximately a message selected at another point.

このような考え方は今日の情報理論の基礎となつていわれているが、本来は機械的なコミュニケーションに貢献するモデルと言える。後で見るように、言語コミュニケーションは人間のコミュニケーションとしての要素を加味して考えなければならない。

⁴⁾このような解説は、厳密なコミュニケーション

理論から見れば、要素に不足や部分の精緻さを欠いているが、ここでの議論には十分であると考えられる。詳しくは池上(1984)を参照。

⁵Lyons (1968: 404).

⁶たとえば「ワンワン」「ニャー」などの擬態語は、指示されるものとなんらかの関連性(有契性)が感じられないわけではないが、英語では bowwow, mew となるなど、擬態ですら言語によって表現のされ方が異なっている。

⁷弟だと little/younger brother, 兄だと big/older brother としなければならない。Sister も同様である。

⁸母語話者の感覚では、この指示の違いは単に冠詞の有無による意味の差ではなく、形式そのものが意味と結びついている認識になっていると指摘されている。たとえば、ピーターセン(1988)『日本人の英語』参照。

⁹たとえば、「山」は、La montagne, Der Berg で仏独ともに男性とみなすが、「地球」は、La terre, Die Erde と性が異なる。英語では mountain, earth となり、人称代名詞で he, she と指す場合を除いて性が意識されることはないようである。最近では、日本語でも政治的公正(PC: political correctness)の影響で中立的な表現が好まれる傾向にある。(たとえば「父兄」が「保護者」, 「стюワーデス」が「客室乗務員」となっている。)

¹⁰このような言語の恣意性は、言語習得において非常に重要な側面を持っていると考えられる。特に語(word)の習得において、現実世界を言語で「分化」していく際に必要なものと言える。恣意的ではあっても、言語記号を使ってコード化されることによって、言語記号とそれらの指示する意味に差違が生じる。つまり、形式の差違によって意味を獲得し、概念を明確化することになる。この過程は、語を習得するという過程であり、言語習得では必須の段階である。たとえば、幼い時期に身近に犬がいるような環境で育てば、「イヌ」とそれ以外を区別する分化をしながら、語「イヌ」とその概念を習得していくのである。このような

分化による語の獲得と並行して、文法の獲得がおこなわれる。第1言語の習得は例外なしに起こるので、「言語生得説」では、習得が生得的に持っている言語能力によって引き起こされると考える。

¹¹詳しくは Canale and Swain (1980) 等を参照。

¹²さらに、そうした対比的な傾向の現れとして、以下の対応表現を考えることもできる。

(i) a. 彼はいい大統領になれるよ。

b. He will make a good president.

一般に、(ib)の用法の make は第2文型の SVC をとっていて、日本語では「～になる」の意味になるとされているが、make がもともと対象にはたらきかけて「～にする」という発想から出ていると考えられる。この英語の用法では通例より意味の変化をいい、利害の間接目的語(この場合 him)をとることがある。

(ii) I am very fond of John and I will make him a good wife.

¹³たとえば、池上(1981, 1982)を参照。

¹⁴これらの「文字通り」としている表現ですら、もともとメタファーとしての表現である可能性がある。たとえば、(38a')の fire は語源的には「火をつける」「発砲する」からの転用と考えられる。「解雇する」をしいて文字通りに英語訳すれば to force someone to leave their job や to let someone go となろう。日本語では、単に「やめさせる」とも言えるし、「首にする」や「暇をやる」などの表現もある。発信者にも受信者にも、これらがメタファーであるとの意識がないことも考えられる。日常的に使用されていくことによって、メタファーとしての目新しさや斬新さが薄れていき、表現が定着していくと考えられる。

したがって、ここでメタファーというのは日常言語での用法であり、文学作品に見いだされるような修辞法上の用法ではない。つまり、メタファー表現はもともとは創造的発見的な理解と結びついているものの、ある言語文化において定着してしまえば、もはやそれ以外に表現できないものとなるということになる。

¹⁵(40)にはHe kicked the bucket.という口語表現もある。

¹⁶これも日本語と同じで、コンテクストによる。「慇懃無礼」というような状況が考えられるので、表現の長さが必ずしも敬意とはならず、たとえば、丁寧な表現で相手を蔑んだり、脅したりするということが日本語と同様に可能である。

¹⁷記号論を網羅的には扱っていない。そのため伝達の経路・チャンネルについては触れることができなかった。たとえば、電話における言語コミュニケーションには、特徴的な構図があると思われる。

参考文献

- Canale, M. and M. Swain. 1980. "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing," *Applied Linguistics* 1, 1-47.
- デュボア他. 1980. 『ラールス言語学用語辞典』大修館書店.
- Geis, Michael L. 1988. *The Language of Conversation*. Eichosha Shinsha.
- 池上嘉彦. 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦. 1982 「表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語—」『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』大修館書店. 32-110.
- 池上嘉彦. 1984. 『記号論への招待』岩波新書.
- 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光. 1994. 『文化記号論—ことばのコードと文化のコード』講談社.
- 小泉保. 1995. 『言語学とコミュニケーション』大学書林.
- 浜本純逸. 1998. 「国語科における総合的な学習」『日本語学』17, 4-9.
- 西辻正副. 2002. 「学校教育におけるメディアリテラシーとことばの教育のこれから」『日本語学』21, 80-87.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics Vol. 1 & 2*. Cambridge University Press.
- 新里真男. 1993. 「コミュニケーションのための英語教育」『英語展望』99, 2-7.
- ピーターセン, M. 1988. 『日本人の英語』岩波書店.
- Shannon, C. E. 1948. "A Mathematical Theory of Communication," reprinted with corrections from *The Bell System Technical Journal*, 27, 379-423.
- 鈴木孝夫. 1978. 『ことばの人間学』新潮文庫.
- 内田伸子. 1999. 「『生きる力』としてのことばをはぐくむ」『日本語学』18, 8, 4-13.1